

劇場閉鎖後のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と そのメンバーによるコンサートとラジオ放送用収録

—— 1944年11月の活動を中心に ——

佐 藤 英

はじめに

ナチス・ドイツにおいて、1943年から行われた総力戦の措置の一環として国内の劇場が閉鎖されたのは、1944年9月1日からである。この措置により、ドイツ国内における演奏家の活動は、もっぱらラジオや映画のための演奏、軍需工場等における慰問行事とされた。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の場合も同様で、劇場閉鎖後はこうした活動のみに従事することになるはずだった。ところがウィーンの大管区長バルドゥール・フォン・シーラッハの決定により、実質的な規制緩和が行われた。これにより、フィルハーモニー・コンサート等の自主的な公開コンサートの開催も可能になったのである。こうして開催にこぎつけたウィーン・フィル主催の最初の公演は、1944年10月のヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮によるフィルハーモニー・コンサートだった。これと相前後して、オーケストラのメンバーによるアンサンブル・コンサートも開催されるようになった¹。

本稿は、劇場閉鎖が継続されつつも、さまざまな公開コンサートの回数が次第に増えていった時期の例として、主に1944年11月に行われたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とそのメンバーによるウィーンにおける音楽活動について、詳細に検証を試みるものである。今回の検証の対象となるのは、この時期に政府によって奨励されたラジオ放送のための活動のほか、さまざまな機会に

公開の場において行われたコンサートや行事である。これにより、当時のウィーンのクラシック音楽文化のメインストリームと言える状況の再構成を試みる²。その際には、空襲など、日常生活の営みにかかわる事例についても言及し、苦難に満ちた当時の様子も把握するようにしたい。

検証を始める前に、本稿において使用する資料について述べておきたい。

コンサートに関する情報は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のホームページで公開されている「コンサートアーカイブ Konzertarchiv」(ドイツ語版)³、ウィーン楽友協会のホームページの「コンサートアーカイブ Konzertarchiv」(ドイツ語版)⁴、ウィーン・コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク 検索 Suche in der Archivdatenbank」(ドイツ語版)⁵の検索結果が主たる情報源である。本稿において示されるコンサートの記録(特に日付、開演時刻、開場、演奏者、曲目)は、特記がない場合を除き、すべてこれらのデータベースの資料に基づいている⁶。このほか、指揮者が残していた記録にアクセス可能だった場合には、これも参照し、情報の確認を行っている。具体的には、自筆の演奏記録ノートではクレメンス・クラウス⁷、およびカール・ベーム⁸、遺族が演奏家の遺品をもとに編纂した評伝ではヨーゼフ・カイルベルトがそれにあたる⁹。

今回の検証で扱うコンサートについては、戦争末期ゆえ、データベースから得ることができない情報も多い。また、たとえ公演日が特定できても、曲目は不明であるなど、データベース上の情報の欠落も少なからず認められる。また、これ以外の会場で行われた公演のうち、特にウィーン・フィルのメンバーが個別に出演したものについては、上述の各種データベースによって情報を把握することはできない。そこで、オーストリア国立図書館のホームページにおいて閲覧可能な歴史的な新聞のデジタルデータ(ANNO)を利用した¹⁰。今回は、以下の3つの新聞を調査対象とした。すなわち、『フェルキッシャー・ベオバハター Völkischer Beobachter』のウィーン版(Wiener Ausgabe)、『ノイエス・ヴィーナー・タークブラット Neues Wiener Tagblatt』、『クライネ・ヴィーナー・クリークスツァイトゥング Kleine Wiener Kriegszeitung』がそれであ

る。論者は1944年11月に刊行された上記3紙の全ページに目を通し、クラシック音楽関係の記事や広告をピックアップすることにより、情報収集を行った。

当時の音楽批評は、ナチ政権によって選抜された精鋭が演奏を担ったためと思われるが、批判的な論調は影を潜め、演奏のプラスの面を紹介するものばかりである。したがって、本稿においては、ウィーン・フィルのものを中心に、批評に認められる特徴的な話題を紹介するように努めた。ウィーン・フィルのメンバーが出演する室内楽アンサンブル等の公演についての批評は、コンサート・データの補足として積極的に活用した。今回は扱う公演数が多く、紙数の都合で個々の批評の内容に立ち入ることはできないが、得られた批評記事の出典は可能な限りすべて示した。批評記事は、コンサートが実際に開催されたことの証となるからである。

ラジオ放送のために録音が実施された日付は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団歴史資料室に残されているラジオ放送に関する手稿の資料に基づいている¹¹。ウィーン・フィルのホームページの「コンサートアーカイブ」においても、「ラジオ・コンサート Rundfunk-Konzert」として放送日のデータが登録されているが、原本の内容が正確に反映されていないものがある。録音データの確認にあたっては、ウィーン・フィルの歴史資料室に保管されている、1944/45年シーズンの演奏日を記録した手書きの管理カードもあわせて参照した¹²。

以上のデータによって把握できない収録データについては、他の資料によって補完した。具体的には、LPやCDとして刊行されているものについてはその記録、また各種ディスコグラフィである。音源が市場に流通していないもの、あるいは流通してはいるものの、オリジナル音源の検証が可能だったものについては、それらの資料のデータを参照した。未刊行の音源に関しては、オーストリア放送協会（Österreichischer Rundfunk）、バイエルン放送協会（Bayerischer Rundfunk）、ベルリン・ブランデンブルク放送協会（Rundfunk Berlin-Brandenburg）、ドイツ放送アーカイブ（Deutsches Rundfunkarchiv）がデータを提供して下さったばかりか、可能なものについては現存する音源を試聴できるようにして

くださった。

放送日の記録については、放送局やウィーン・フィルの資料室のいずれにおいても残されていないようだ。そのため、新聞に掲載された番組表が主な情報源である。基本的な調査は『フェルキッシャー・ベオバハター』のベルリン版を用いて行ったが、ここから手掛かりが得られないことも少なからずあるため、先の3紙をはじめ、他の新聞も参照して状況の把握に努めた。

空襲に関する資料は、ウィーン市の監修で制作され、現在インターネットで公開されているものと¹³、ヨハン・ウルリヒによる研究成果を基礎としている¹⁴。前者はレオポルト・グルーリヒによる資料がベースで、これにウィーン市庁舎の空襲報告とウルリヒの研究成果で情報の補完が行われたものである。ただし、このデータにはウルリヒの調査結果がすべて反映されていないため、本稿においてはウルリヒの成果からも直接的に情報を得た。また、被害状況の把握にあたっては、クラウス・クリスティアン・フェーグルによる当時の映画館に関する研究も参考にした¹⁵。

なお、コンサートの開催日と放送用録音の実施日、ならびに放送日には、原則として、それぞれの事例の日付を最初に記した際に、曜日も併記した。これにより、それぞれの週でオーケストラとそのメンバーがどのように活動していたかも把握できるようになるはずである。

1. 劇場閉鎖期間中の公開コンサートはどのようなものだったか？

1944年11月のウィーン・フィルとそのメンバーによる活動を検証する前に、同年9月からの劇場が閉鎖されるという状況がどのようなものであったか、それぞれの催しにおいて共通して言えることを記しておきたい。ここで述べるのは、音楽家の報酬、コンサートの運営に関する制約、そしてこの政策がもたらした音楽文化への影響についてである。

既に述べたように、同年9月からの劇場閉鎖以後、音楽家は原則としてラジオや映画の仕事、あるいは慰問のためのコンサートなどに従事することが求め

られていた。総力戦という国難の時代であっても、芸術家に対する報酬は保証されていた。軍需工場等における仕事に加え、コンサート、放送、映画のために働いた芸術家には、労働賃金に加え、月に平均4～6回の出演に対し、その都度、出演料が支払われたのである。その出演料は、歌手の例を挙げると、例えばアニー・コネツニは1回の出演につき1500ライヒスマルク、マルタ・ロースは1200ライヒスマルク、エステル・レシーは1100ライヒスマルク、パウル・シェフラーとアントン・デルモータは1000ライヒスマルク、ヘルベルト・アルゼンは800ライヒスマルクという金額だった¹⁶。

しかし、原則に基づく音楽家の活動には、一定の制約の元、規制緩和が行われつつあったことも事実である。すでに述べたように、ウィーン・フィルの場合、自主運営のコンサートを開催する許可を得ていた。これは、ウィーンに限ったことではなかった。ベルリンにおいても、同年10月初旬にはシュターツカペレ・ベルリンによるブルックナーの《交響曲第8番》のコンサート（ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮）が開催され、その批評記事が新聞に掲載された事例が認められる¹⁷。このことから、放送や映画等で活動が許された音楽家による一般向けの公開コンサートは、数は少ないものの、ドイツの各地において開催可能であったことがわかる。このような状況に至った理由を記しているのは、1944年10月20日に『フェルキッシャー・ベオバハター』に掲載された記事である。この記事によると、映画やラジオを超えた領域での演奏活動は、今後は軍需工場や負傷兵の病院におけるものに限らず、「労働するドイツ国民の様々な層」のためのものでもある。そのため、一般販売できる公開のコンサートも、一定の制約のもとで開催できるという。文化的行事は気分転換となり、戦争を勝利に導くために重要なものとみなされたのである¹⁸。

こうした制約が一般販売されるコンサートにおいて実際にあったことをうかがわせるのが、ウィーン・フィルが主催するコンサートの広告である。この広告の宣伝文においては、一般販売に際して、限定数でチケットが販売されることが明記されることがほとんどだった。コンサート会場のキャパシティの関係上、必然的に発売枚数には上限があるわけだが、そのことを意味しているので

はなく、発売に際して制約がある、という意味である。今回扱う時期からは外れてしまうが、例として、1944年12月16日（土曜日）から18日（月曜日）まで、3回にわたって開催されたヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮、ウィーン・フィルによる演奏会を見てみたい。『フェルキッシャー・ベオバハター』ウィーン版にこの「ニコライ・コンサート」の広告が掲載されたのは、同年12月10日（日曜日）である。これによると、チケットはやはり限定数で、12月13日（水曜日）からウィーン・フィルの窓口で購入可能となるという。窓口の受付時間は9時から12時、15時から19時である¹⁹。このコンサートが限定数で発売されたのは、戦争関係の業務に従事する人に一定数のチケットが回され、残りが一般販売されたためだった。コンサートの批評によると、このコンサートに集ったのは国防軍の人、兵器工場の労働者、そして一般市民だったのである²⁰。

聴衆層の変化は、コンサートホールの雰囲気にも少なからず影響を与えた。1945年2月5日にフルトヴェングラーは、亡命するためスイス国境付近に滞在した折に、カール・シュトラウベに宛てに、自分の交響曲を初演できる環境が無くなったと述べる。「ぼくはウィーンとベルリンで指揮しました（中略）。ぼく自身としては、できるかぎりいい演奏をと心がけたのですが、それが決してやさしいことではありません。会場がお粗末なうえに、聴衆も一部はもはやかつてのようではありません」と²¹。コンサートの文化の在り方が、戦争の激化による世相を反映したものになっていったのである。

2. 1944年11月のウィーン・フィルとそのメンバーによる活動

11月上旬のラジオ放送と公開コンサートのための演奏

11月に開催されたウィーン・フィルの最初のコンサートは、ウィーン国立歌劇場総監督の地位にあったカール・ベームの指揮によって行われた。11月1日（水曜日）と2日（木曜日）の19時から、コンツェルトハウス大ホールで開催されたものがそれである。曲目はモーツァルトの《レクイエム》で、イルムガルト・ゼーフリート（ソプラノ）、エリーザベト・ヘンゲン（アルト）、アントン・

デルモータ（テノール）、ヘルベルト・アルゼン（バス）、ヴァルター・パッハ（オルガン）、ウィーン国立歌劇場合唱団が共演した。この初日（11月1日）にもウィーンでは空襲があり、ファヴォリーテン、ジンメリング、ドナウシュタット、シュヴェヒャートで被害が生じた²²。

このような状況であったにもかかわらず、コンサートが無事に開催されたことは、新聞各紙の批評によって確認できる。『フェルキッシャー・ベオバハター』ウィーン版のコンサート評によると、11月1日と2日の演奏はウィーン・フィルによる巧みな伴奏の中で、合唱パートにおいては「音色の多様性、ダイナミクスのバランス、リズムの正確さ」、ソリストの四重唱においては「室内楽に比較できる性質のもの」が認められたという²³。『ノイエス・ヴィーナー・タークブラット』においては、ベームが「嘆きや諦め、さらには信仰の確信といった、非常に純粹で人間的な歌の神秘的な美しさに、強く訴えかけるような音のリアリティを与えた」ことが高く評された²⁴。

11月3日（金曜日）の午前中にも空襲があり、ラントシュトラーセ、ヴィーデン、ファヴォリーテンが標的となった²⁵。この日の夜、19時30分から、国民教育施設ウラニア（Volksbildungsstätte Urania）において、ニーチェ生誕100年を記念する講演会の第3回が開催された²⁶。この会の前半は、『ツァラトゥストラはかく語りき』からの抜粋の朗読だった。後半では、フランクの《ヴァイオリン・ソナタ》が演奏された。ヴァルター・パンホーファーのピアノ伴奏でヴァイオリンを弾いたのは、ウィーン・フィルのコンサートマスターの一人、ヴァルター・バリリである²⁷。

ベームに続くウィーン・フィルの公演として、11月5日（日曜日）と6日（月曜日）の19時から楽友協会大ホールにおいて、クレメンス・クラウスの指揮による「フィルハーモニッシェ・アカデミー」（以下、「アカデミー」とする）が行われた。この時期、クラウスはウィーンにおいて積極的にコンサートに出演していた。彼の任地はミュンヘンのバイエルン国立歌劇場だったのだが、歌劇場が空襲によって焼け落ちたため、この街において活動を継続することは不可能になっていた。彼は1944/45年のシーズン中に他の都市での公演のオファーを

受けてはいたものの、実現に至らないケースが多かった。例えば、イタリアで予定されていた3回のコンサートのために日程調整が行われたが²⁸、最終的にこの企画は流れてしまった。そのような中、ウィーンにおける「アカデミー」は、クラウスとウィーン・フィルがドイツ帝国放送協会の支援を受けてラジオ放送のために開催されたものというだけあって、この先の公演についても中止されることはなかった。今回の11月の公演も、両日とも空襲に見舞われたものの²⁹、19時開演のコンサートには支障はなかった。プログラムは、モーツァルトの《交響曲第41番「ジュピター」》、アルフレート・ウールの《クラリネットとオーケストラのための協奏交響曲》（独奏はウィーン・フィルのクラリネット奏者レオポルト・ヴラッハ）、ビゼーの《アルルの女》第1組曲、スメタナの《売られた花嫁》序曲だった。

この日、特に話題となったのは、1909年にウィーンで生まれた若手作曲家ウールの新作だった。テンポの速い両端楽章の間に、「倒れた仲間のために」と説明のある緩徐楽章が置かれた作品である³⁰。『フェルキッシャー・ベオバハター』によると、両端楽章の「力強い運動性」と緩徐楽章の「深い情緒を湛えた抒情詩」が明確なコントラストをなすものとして受け止められた。特に第2楽章は、「倒れた仲間のために」というインスピレーションのとおり、「瞑想的な休息の場として感じられる、抒情的で表現豊かなエピソード」とみなされた。ヴラッハの独奏とオーケストラは見事な演奏を披露し、「会場にいた作曲者に成功をもたらした」³¹。

このコンサートに先んじて、演目の一部が聴衆なしで放送用に収録された。クラウス本人がリハーサルの一環としてラジオ放送のために録音を行うという認識であったためと思われるが、コンサート開催前の放送録音に関しては、少数の例外を除き、彼の「指揮記録」に記載がないことが多い。今回もその例外ではなく、「アカデミー」の放送録音について記録を残したのはウィーン・フィルである。このオーケストラの「放送記録」によると、11月3日（金曜日）と4日（土曜日）に楽友協会でもーツァルトの《交響曲第41番「ジュピター」》とウールの《クラリネットとオーケストラのための協奏交響曲》（クラリネット

独奏はレオポルト・ヴラッハ）、スメタナの《売られた花嫁》序曲が録音されたことになっている³²。ただ、この1日で3曲の収録が完了したというわけではなさそうだ。少なくとも、スメタナの収録は11月9日（木曜日）に持ち越されたことが、ウィーン・フィルの「放送記録」、ソ連軍に接收された録音テープの記録³³、「アカデミー」の後に個別に実施された録音だったためにクラウス本人によって記入された彼の「指揮記録」によって確認できる。モーツァルトとウールの録音は現在、オーストリア放送協会に保存されているが³⁴、これらの録音がいつ放送されたかについて、当時の新聞から情報を得ることはできなかった。

「アカデミー」の公開コンサート終了後、11月7日（火曜日）から10日（金曜日）にかけて、クラウスとウィーン・フィルは放送用収録を行った。11月7日は空襲の合間をぬっての収録だった³⁵。ウィーン・フィルの「放送記録」とクラウスの「指揮記録」をもとにすると、放送用に録音されたのは以下の曲目だったことがわかる。

11月7日（火曜日）、楽友協会大ホール、ブルックナー：《テ・デウム》、トルーデ・アイッペルレ（ソプラノ）、エレナ・ニコライディ（アルト）、ユリウス・パツァーク（テノール）、ゲオルク・ハン（バス）、フランツ・シュッツ（オルガン）、ウィーン国立歌劇場合唱団³⁶。

11月8日（水曜日）、楽友協会大ホール、ラヴェル：《スペイン狂詩曲》³⁷。

11月9日（木曜日）、コンツェルトハウス・モーツァルトザール、リヒャルト・シュトラウス：〈あした〉作品27-4、〈ツェツィーリエ〉作品27-2、〈懐かしい面影〉作品48-1、〈冬の愛〉作品48-5、以上、ユリウス・パツァーク（テノール）、スメタナ：《売られた花嫁》序曲。ウィーン・フィルの記録によると、リヒャルト・シュトラウスの歌曲では、先の4曲のほか、〈君を愛す〉作品37-2も演奏されたことになっているが、クラウスの記録にこの曲の記載はない³⁸。

11月10日（金曜日）、コンツェルトハウス・モーツァルトザール、モーツァルト：〈行進曲 ニ長調〉K.249, 〈行進曲 ニ長調〉K.335-1, 〈3つの行進曲〉K.408から（演奏曲目不明）³⁹。

これらの録音のうち、ラジオ放送が確認できたのはブルックナーとラヴェルである。いずれもドイツ放送の番組「大コンサート——ヨーロッパの永遠の音楽」においてであり、前者は1944年12月5日（火曜日）⁴⁰、後者は1945年1月2日（火曜日）、20時15分から22時にオンエアされた⁴¹。参考までに、当時のウィーンにおけるラジオ放送に関して、ヴァルター・バリリの回想をもとに補足すると、敵機に察知されないよう、電話線を通じて番組が届けられていたという⁴²。すべてがそのようになっていたとは考えにくいだが、そのような地区もあったということなのだろう。

クラウスとの放送のための仕事の合間に、ウィーン・フィルのメンバーは室内楽のコンサートを行った。11月7日（火曜日）の19時からコンツェルトハウス・モーツァルトザールでは、コンサートマスターのヴィリー・ボスコフスキーを中心とするボスコフスキー・トリオによる公演が開催された。コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク検索」のデータによると、この日の演目は曲目が不明である。10月24日の『フェルキッシャー・ベオバハター』に掲載された広告において、この日の公演がこのトリオによるコンサートシリーズの第2夜とされていることが、曲目を推測する鍵となりそうだ⁴³。11月13日（月曜日）に同ホールで行われたこのトリオによるコンサートは、開催済みの演目の「再演」とされている⁴⁴。11月13日の曲目はシューベルトの《ピアノ三重奏曲第2番》と《ピアノ五重奏曲イ長調「ます」》と特定できる（詳細は後述）。しからは、11月7日の曲目もこれと同一と考えてよいだろう。

この2日後の11月9日（木曜日）の19時からは、楽友協会大ホールにおいて、コンサートマスターのヴォルフガング・シュナイダーハンを筆頭とするシュナイダーハン四重奏団の公演が行われた。この日はオール・ベートーヴェン・プログラムで、《弦楽四重奏曲第6番》、《弦楽四重奏曲第16番》、《弦楽四重奏曲

第8番「ラズモフスキー第2番」の3曲が取り上げられた⁴⁵。

ヴォルフガング・シュナイダーハンと彼の四重奏団はこの時期に多くの活動の機会を得ていたのだが、なぜこれが可能であったのか、その背景をここで確認しておきたい。シュナイダーハンは1937年にウィーン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターに就任し、翌1938年にはウィーン・フィルのコンサートマスターも担当した。その後、1949年にソリストとして活動するために退団するまで、彼はこのオーケストラに在籍した。1940年から1945年にかけて、彼はナチ党員でもあった⁴⁶。オリヴァー・ラートコルプも指摘するように、オーケストラの実務面において尽力した第2ヴァイオリン奏者オットー・シュトラッサーとともに、自身とオーケストラのメンバーの活動を滞りなく進めていくためにこの地位に就いたと言われている⁴⁷。それが大いに発揮されたのは、彼が主催するシュナイダーハン四重奏団の活動だった。この四重奏団のメンバーには、シュナイダーハン、シュトラッサーのほか、ヴィオラのエルンスト・モラヴェッツ、チェロのリヒャルト・クロチャックも加わっていた。モラヴェッツとクロチャックの妻はユダヤ人だった。それゆえ彼らは、本来であればオーケストラで活動することはできなかった。そうしたメンバーはこの他にもいたのだが、1938年8月22日にフルトヴェングラーの仲裁によって9名のメンバーの活動が特別に許可された。この特別措置は先の2人にも適用された⁴⁸。シュナイダーハンがナチ党に入党したのはこの2年後ということになるが、それはフルトヴェングラーの計らいによって実現した特別措置をさらに強固にするものであったと言えそうだ。シュナイダーハンとシュトラッサーがナチスに従順な態度を示したこと、メンバー4人の演奏技術が高かったこともあり、ゲッベルスはこの四重奏団に目をかけた。劇場閉鎖が指示された後、シュナイダーハン本人に加え、この四重奏団も「天賦の才能を持つ芸術家」のリストに加えられ、音楽家の活動が制約を受けた時期であっても演奏することが認められた⁴⁹。公の場でのコンサートにおいて政府の希望通りに活躍してもらうため、この四重奏団を国有化しようとする動きもあったほどである⁵⁰。また、ラジオ放送の番組においてもこの四重奏団が活躍することは期待された。1945年2月、ゲッベ

ルスは放送関係者に対し、彼らを番組に積極的に起用するよう、指示したのだった⁵¹。

11月中旬のオーケストラ・コンサート

11月11日（土曜日）から13日（月曜日）の3日間にわたり、楽友協会大ホールにおいてウィーン・フィルのフィルハーモニー・コンサートが行われた（いずれも19時開演）。これを指揮したのはカール・ベームで、演目はハイドンの《交響曲第101番「時計」》、プフィッツナーがヴェルナー・フンダートマルクの詩に曲を付けた《男声合唱と小オーケストラのための3つの歌》作品53（合唱はウィーン国立歌劇場合唱団）、ベートーヴェンの《交響曲第5番「運命」》の3曲だった。

この日の最大の呼び物となったのは、この日に初演されたプフィッツナーの作品だった。ベームのコンサートは、先のクラウスの「アカデミー」が若手の作品の紹介の場ともなっていたのは対照的に、この年に75歳を迎えた老齢の作曲家の至芸に接する機会となった。演奏された《3つの歌》は〈至福の夏〉、〈変容〉、〈兵士の歌〉の3曲で構成されているが、フィルハーモニー・コンサートにおいては珍しいことに、この第3曲がアンコールとして演奏された。演奏後、会場にいた作曲者は指揮台に呼ばれ、万雷の拍手を浴びた⁵²。『クライネ・ヴィーナー・クリークスツァイトウング』の批評においては、「正真正銘の旋律の着想と、洗練された楽曲構成の腕前」に見るべきところがあり、「男声合唱曲において永続的な価値」を持つものと評された⁵³。

11月中旬から下旬にかけてのラジオ放送と商業用レコードのための演奏

このフィルハーモニー・コンサートの最終日（11月13日）には、楽友協会大ホールにおいて、初演において好評を博したプフィッツナーの《男声合唱と小オーケストラのための3つの歌》が放送用に無観客で収録された。メンバーは、公開のコンサートと同一である。フィルハーモニー・コンサートにおける演奏曲目のうち、この作品だけが放送用に収録されたのは、1944/45年のシーズン

最初に、オーケストラが放送局にこのコンサートシリーズでの演奏曲目の一覧を送付し、番組で必要なものを取捨選択できるようにしていたためと思われる⁵⁴。今回の録音は、1945年1月2日（火曜日）のラジオ番組「大コンサート——ヨーロッパの永遠の音楽」⁵⁵、さらに同年2月16日（金曜日）の21時から22時、ドイツ放送における「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のプフィッツナー・コンサート」でオンエアされた⁵⁶。

さて、ベームはこの翌日の11月14日（火曜日）から、モーツァルトの《魔笛》を放送用に収録するプロジェクトに取り組んだ。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、共演した歌手は以下のとおりである。ヘルベルト・アルゼン（ザラストロ）、アントン・デルモータ（タミーノ）、エミー・ローゼ（夜の女王）、イルムガルト・ゼーフリート（パミーナ）、ヒルデ・コネツニ（第一の侍女）、エリーザベト・ヘンゲン（第二の侍女）、エレナ・ニコライディ（第三の侍女）、エーリヒ・クンツ（パパゲーノ）、エリーザベト・ルートガース（パパゲーナ）、ペーター・クライン（モノスタス）、カール・フリードリヒ（第一の司祭と第一の武士）、パウル・シェフラー（語り、第二の司祭、第二の武士）、ウィーン少年合唱団のメンバー（3人の童子）、ウィーン国立歌劇場合唱団。同年9月30日に帝国放送ウィーン局のハンス・ザックスから送付された文書によると、収録はベームの希望により11月14日から16日（木曜日）までの3日をかけて実施される計画だった⁵⁷。この日程は、ウィーン・フィルの「放送記録」とベームの「指揮記録」も同様である。部分的に残された録音のデータも、録音がこの予定で進められたことを示している。ドイツ放送アーカイブに残されている第1幕第1曲は、1944年11月14日から16日の録音とされている⁵⁸。

この一方で、ベルリンのブランデンブルク放送協会には、ソ連軍によって接収されたテープとして、《魔笛》第2幕の第10曲から終わりまでの約64分の録音も現存している。この録音の指揮者は不明だが、出演者はアントン・デルモータ、エーリヒ・クンツ、ヘルベルト・アルゼン、収録は1944年11月17日（金曜日）、ウィーン楽友協会大ホールとされている⁵⁹。歌手の情報と録音の時期と場所から、この録音は件のベーム指揮によるものとみてよいだろう⁶⁰。

問題は、この資料に録音日として11月17日と記されていることだ。ソ連軍に収められたテープの録音データには、正確さを欠いている事例がときおり見受けられるため注意を要するのだが、ウィーンに残された当時の資料のなかにもこの日付を含むものがある。1946年にウィーン国立歌劇場合唱団が発行した、1944/45年と1945/46年のシーズンの当団の活動記録を記した冊子がそれである。この冊子本体と訂正一覧の記載内容においては、録音日は1944年11月14日から17日とされている⁶¹。以上の点を踏まえると、当該の録音が行われた期間としては1944年11月14日から16日までは確実で、場合によっては17日にも収録が行われた可能性が想定できる。

なお、《魔笛》の録音の合間、すなわち11月15日（水曜日）に、ドイツ空軍の撃墜王の一人だったヴァルター・ノヴォトニーの葬儀が行われたのだが、ウィーン・フィルはベームの指揮で追悼演奏をすることが求められた。演奏されたのはワーグナーの《神々の黄昏》から〈葬送行進曲〉である⁶²。また、《魔笛》の録音終了後、ベームはドイツ・エレクトローラ社のためにレコーディングをしている。11月18日（土曜日）と19日（日曜日）、楽友協会大ホールにおけるセッションにおいて、ブラームスの《交響曲第1番》が録音された⁶³。これらの収録の合間にもアメリカ軍による空襲は継続されており、11月15日、17日、18日、20日には市内で被害が生じた⁶⁴。

11月に収録された《魔笛》の録音は、同年12月28日の新聞においては大晦日の午後にドイツ放送で電波に乗ることが予告され⁶⁵、この前日の『フェルキッシャー・ベオバハター』ウィーン版においては具体的に15時40分からであるとの情報も掲載された。しかし、当日の『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版では、曲目はワーグナーの《さまよえるオランダ人》とされている⁶⁶。正月明けのラジオ番組批評で、クレメンス・クラウス指揮バイエルン国立歌劇場によるワーグナーの件の作品が取り上げられていることから⁶⁷、《魔笛》の放送が延期されたことは確実である。この決定にゲッベルスに関わった可能性は高いように思われる。彼の日記においては、この変更を直接、指示したことを示す記述は認められない。だが、1944年大晦日の番組については、「いつも

以上に何度も文句を言」い、最終的に完成した番組編成に「今とても満足」していると自画自賛を述べたところがあるのだ⁶⁸。大晦日の番組に関しては、12月27日の正午までにゲッベルスに提出することになっていたが、これに間に合わないという報告があった⁶⁹。おそらく、《魔笛》はその間に合わなかった報告に属しており、関係者は事後承諾という形で手続きを進めようとしたのではないか。そのため、情報が決定事項であるかのように新聞に掲載されたものの、ゲッベルスが難色を示し、最終的に《オランダ人》に変更になったというのが実情だろう。結局、《魔笛》の録音は、翌1945年2月まで放送が見送られた。2月1日（木曜日）の20時45分から22時に第1幕⁷⁰、翌2月2日（金曜日）の20時15分から22時に第2幕が、ラジオ放送の帝国プログラムにおいて取り上げられた⁷¹。

1944年9月からウィーン・フィルが毎月行っていた、ジングシュピールの放送シリーズのための録音は、11月にも実施された。この機会に収録された演目はヴェンツェル・ミュラーの《プラハの姉妹》で、9月と10月のこのシリーズの演奏で好評を博したロヴロ・フォン・マタチッチが再び指揮者として起用された。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、キャストは次のとおりである。アロイス・ペルネルシュトルファー（ヘール・フォン・ブルンメル）、アンダーガスト・リースル（クネグンデ）、イエッティ・トピッツ＝ファイラー（ヴィルヘルミーネ）、メーナ・エルゼ（ロルヒェン）、エーリヒ・クンツ（カスパル）、フーゴ・マイヤー＝ヴェルフینگ（ヘール・フォン・ゲルステンフェルト）、フレット・リーヴェール（騎士シュミーズ）、トニ・ニースナー（ヨハン・クレプス）、フリッツ・ピレッツキー（クリスピン）、フランツ・エメリヒ（夜警）。ここに出演した合唱を指揮したのは、ラインホルト・シュミートである。この作品については、ベートーヴェンが《ピアノ三重奏曲第11番「カカドゥ変奏曲」》を作曲するにあたってこの第1曲のアリアを主題としたことで、その名がかろうじて私たちの記憶に残っている。作品のプロットは、放送評によると、男を女に変装させることによって生じる騒動を描くもので、「コミカルなオペラというより、ふざけた芝居」と呼ぶべきものであるようだ⁷²。ウィーン・フィルの「放

送記録」によると、収録は11月21日（火曜日）から23日（木曜日）までの3日間、放送局において行われた、とある。それぞれの日のスケジュールを示す文書によると、11月21日の9時から12時にはオーケストラを入れたりハーサル（放送局の第1スタジオ）、11月21、22、23日のいずれも16時から19時には放送のための録音（放送局の第2スタジオ）が計画されていた⁷³。完成した録音は、1944年12月20日（水曜日）の21時から22時にドイツ放送においてオンエアされた⁷⁴。この番組については、『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版に批評が掲載された。この批評においては、マタチッチとウィーン・フィルによるこの演奏に十分な成果が認められるだけでなく、この放送が忘れられた作品にふたたび接する機会となったことに対する感謝の意も述べられた⁷⁵。

11月中旬の室内楽コンサート

1944年11月中旬に開催された室内楽のコンサートは、11月19日がシューベルトの命日であることを意識したものとなっていた。例えば、11月17日（金曜日）の19時から楽友協会大ホールにおいて開催されたシュナイダーハン四重奏団のコンサートは、「シューベルト116回目の命日」というコンセプトの下でプログラムが構成された。演目は《ピアノ五重奏曲イ長調「鱒」》と《八重奏曲へ長調》の2曲で、四重奏団のメンバーに加え、フリードリヒ・ヴューラー（ピアノ）、オットー・リューム（コントラバス）、レオポルト・ヴラッハ（クラリネット）、ゴットフリート・フライベルク（ホルン）、カール・エールベルガー（ファゴット）が演奏に参加した⁷⁶。11月13日（月曜日）の19時からコンツェルトハウス・モーツァルトザールで開催されたボスコフスキー・トリオのコンサート（第2夜）も、先の例と同様に、シューベルトの《ピアノ三重奏曲第2番》と《ピアノ五重奏曲イ長調「ます」》を取り上げるものだった。この時は、ヴィリー・ボスコフスキー（ヴァイオリン）、リヒャルト・クロチャック（チェロ）、ヴァルター・パンホーファー（ピアノ）といったボスコフスキー・トリオのメンバーのほか、エリック・ヴァイス（ヴィオラ）、オットー・リューム（コントラバス）も演奏に加わった⁷⁷。この催しは、11月19日（日曜日）の16時に同ホー

ルで再演が行われたようだ⁷⁸。また、11月21日（火曜日）と22日（水曜日）の19時、コンツェルトハウス・モーツァルトザールにおけるウィーン・コンツェルトハウス四重奏団のコンサート（第2夜）でも、ドビュッシーの《弦楽四重奏曲ト短調》、ハイドンの《弦楽四重奏曲》（番号不明）とともに、シューベルト《弦楽四重奏曲第14番ニ短調「死と乙女」》が演奏された⁷⁹。なお、この時期のウィーン・コンツェルトハウス四重奏団のメンバーは、アントン・カンパー、カール・ティッツェ、エーリヒ・ヴァイス、フランツ・クヴァルダの4名である⁸⁰。

11月下旬のオーケストラならびに室内楽のコンサート

11月22日（水曜日）の19時から楽友協会において開催されたウィーン・フィルのコンサートには、指揮者としてヘンドリク・ディールスが招かれた。この指揮者は当時43歳で、彼の故郷アントワープのフランドル歌劇場の音楽総監督の任にあり、同地のオーケストラの設立もした人物だった⁸¹。外国人ではあったが、名の知れた指揮者であったため、ドイツ国内でも演奏許可を得ていた⁸²。ウィーン・フィルとの公演で演奏されたのは、ベートーヴェン《エグモント》序曲、モーツァルト《ヴァイオリン協奏曲第5番》（独奏はヴォルフガング・シュナイダーハン）、フランクの《交響曲ニ短調》である。各紙の演奏評も、この「外国人」指揮者を好意的に捉えるものばかりであった⁸³。ウィーンの聴衆はこの指揮者の動向に関心があったようで、ウィーン国立歌劇場が空襲で灰燼に帰す前日（1945年3月11日）に新聞に掲載されたベルリン・フィルの近況として、カール・ベームのほか、この指揮者に関する話題も伝えられている⁸⁴。

この11月22日（水曜日）には、シュナイダーハン四重奏団により、ベートーヴェンの《弦楽四重奏曲第8番》が放送用に録音された⁸⁵。同曲は、11月9日に楽友協会大ホールにおけるこのアンサンブルの演奏会でも演奏されたものである。先に見たように、この日に開催されたウィーン・フィルのコンサートにおいて、シュナイダーハンはモーツァルトの《ヴァイオリン協奏曲第5番》でヴァイオリン独奏を担当している。ウィーン・フィルのコンサートマスターに

加え、ソリストとしての力量が問われる仕事を相当量こなしていたことが、このような記録から垣間見ことができる。

11月25日（土曜日）と26日（日曜日）の19時から楽友協会において、ヨーゼフ・カイルベルトを指揮者とするウィーン・フィルのコンサートが開催された。もともと、11月25日から27日までの3日間、クナッパーツブッシュの指揮でウィーン・フィル主催のコンサートが計画されていたのだが、指揮者が病気のため、開催は見送られた⁸⁶。ウィーン・フィルの予定が空いたため、11月26日と27日に楽友協会の主催で、このオーケストラによる特別公演がカイルベルトの指揮で行われることになったのである。そもそもカイルベルトは、1944/45年のシーズンにおいて、楽友協会主催コンサートにおいて、「顔」になるはずだった。実行には移されはしなかったものの、少なくとも20回のコンサートが予定されていたのである⁸⁷。1944/45年のシーズンにおいてカイルベルトがウィーンに客演したのはこの機会だけだったので、楽友協会としては当初の予定の一部を満たすつもりだったのだろう。

カイルベルトがウィーン・フィルのコンサートを最初に指揮したのは、1944年5月4日のプフィッツナーの生誕75年を祝うためのものだった。これに次ぐ共演の機会となったのがこの1944年11月のコンサートである。この11月の演目はすべてモーツァルトの作品で、《魔笛》序曲、《ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」》（独奏はフリードリヒ・ヴェーラー）、《交響曲第39番》だった。コンサートの批評は好意的だったが⁸⁸、指揮者にとっては割り切れないものが残ったようだ。コンサートの開催が急に決まったため、リハーサルに十分な時間を割くことができなかったのである。「オーケストラには少し失望（プロベは1回だけ）」とカイルベルトは書き残している⁸⁹。11月27日のコンサートの後も、彼は「とても美しいコンサート、オーケストラは非常に立派」と述べつつも、準備ができていない管楽器奏者がいたという。カイルベルトの評伝の見解にもあるように、27日のコンサートでは、リハーサルにも26日のコンサートにも参加しなかった演奏者がいたのだろう⁹⁰。ウィーン・フィルの場合、コンサートとオペラの公演を担当しているため、このような事例は珍しいものではない。しかし

この時期には、国立歌劇場においてオペラの公演は行われていない。それにもかかわらず、このようなローテーションとなっていたのは、このオーケストラには連日のようにコンサートと録音が続いており、特に管楽器奏者に負担がかからない方法が模索されていたためとみてよいだろう。実際のところ、カイルベルトによるコンサートと同日の11月25日と26日には、国立歌劇場において、ウィーン国立歌劇場合唱団のア・カペラ・コンサートが開催された。プログラムに含まれていたブラームスの「ハープとホルンを伴う女性合唱のための3つの歌曲」と記されている曲の演奏に際して、ウィーン・フィルのメンバーだったフランツ・イエリネク（ハープ）、ゴットフリート・フォン・フライベルク、ヨーゼフ・ラックナー（いずれもホルン）が参加していたのである⁹¹。

《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のラジオ放送用録音

11月中旬の《プラハの姉妹》に続き、放送用に録音が行われたオペラは、演奏に要する規模と時間という点で、劇場閉鎖後、最大級の作品となったワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》全曲である。この機会に《マイスタージンガー》の録音が行われた理由として、以下の2点があげられる。第一に、《マイスタージンガー》の劇中にも登場する詩人ハンス・ザックスが、この年、生誕450年という節目の年にあたっていた。しかもこの録音が行われる直前、すなわち1944年11月5日がそうであり、ウィーンで刊行されていた新聞においても、彼の業績を回顧する特集が掲載されていた⁹²。第二の理由として、放送に使用できる《マイスタージンガー》の音源を確保する必要があったことである。この作品は、論者による別の論考において示したように、ナチスが政権を掌握してから、ラジオ番組で繰り返し放送されていた⁹³。1943年のバイロイト音楽祭で収録したフルトヴェングラーによる同曲も、同年夏に放送された後、抜粋録音がその後の番組において使用されていた。ところが、1944年8月にラジオ番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」でこの録音の一部が取り上げられた際、フルトヴェングラーから、今後の放送でこれを使用しないように申し入れがあった⁹⁴。そして、ちょうどこの件が取り沙汰された頃に、劇場

閉鎖が実行に移された。オペラの舞台上演が出来なくなったことで、放送コンテンツの重要性は増したものの、当該の作品については放送に使用できる全曲録音の音源が無いという状況が生じていたのである。

ウィーン・フィルとの《マイスタージンガー》の放送用録音に起用された指揮者は、カール・ベームだった。この収録に参加した出演者は次のとおりで、カッコ内が担当した役である。パウル・シェフラー（ハンス・ザックス）、ヘルベルト・アルゼン（ファイト・ポグナー）、アントン・デルモータ（クンツ・フォーゲルゲザング）、ヴィクトル・マーディン（コンラート・ナハティガル）、エーリヒ・クンツ（ジクストゥス・ベックメッサー）、フリッツ・クレン（フリッツ・コートナー）、ゲオルク・マイクル（バルタザール・ツォルン）、ヴィリアム・ヴェルニック（アウグスティン・モーザー）、アルフレート・ムッツァレッリ（ヘルマン・オルテル）、ヨーゼフ・ヴィット（ウルリヒ・アイスリンガー）、アルフレート・イエルガー（ハンス・シュヴァルツ）、マルヤン・ルス（ハンス・フォルツ）、アウグスト・ザイダー（ヴァルター・フォン・シュトルツィング）、ペーター・クライン（ダーヴィッド）、イルムガルト・ゼーフリート（エーファ）、エルゼ・シュルホフ（マグダレーナ）、ヴィクトル・マーディン（夜警）、ウィーン国立歌劇場合唱団、リヒャルト・ロスマイヤー（合唱指揮）、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、カール・ベーム（指揮）。録音の監督者にはフリードリヒ・リーマーのほか、「ザックス」の名前も認められる⁹⁵。この「ザックス」なる人物は帝国放送ウィーン局のプロデューサーで、フルネームはオペラの登場人物と同姓同名のハンス・ザックスである。彼はこの時期に限らず、戦後のウィーン・フィルのコンサートのラジオ中継もしばしば担当した。

当初、ベームが希望したスケジュールは、11月28日（火曜日）から12月1日（金曜日）にかけて第3幕、12月4日（月曜日）から7日（木曜日）にかけて第1幕と第2幕を収録するというものだった⁹⁶。ウィーン・フィルの「放送記録」やベームの「指揮記録」によると、11月28日から12月1日、さらに12月4日と5日、ウィーン楽友協会大ホールにおいての収録とされており、ベームの希望した日数よりも少なくなっている。ベームの「指揮記録」によると、手順が変

更され、11月28日から12月1日には第2幕と第3幕が収録された。ただし、第3幕についてはこの期間のうちにすべてを録り終えられず、12月4日と5日には第1幕に加え、第3幕の幕切れの部分も演奏された。

この《マイスタージンガー》の録音は、ウィーンの新聞の情報によると、第1幕は1945年2月4日（日曜日）の16時から17時30分、第2幕は同日の21時から22時⁹⁷、第3幕は2月18日（日曜日）の16時から18時に、いずれもドイツ放送の番組としてオンエアされた⁹⁸。この演奏は、オーストリアのレコード会社「プライザー」によってCD化された。全13巻のテープのうち、1本が失われているため、発売に際して欠落箇所（第3幕冒頭部分）は、1943年のバイロイト音楽祭におけるヘルマン・アーベントロート指揮の演奏によって補完された⁹⁹。

11月下旬のコンサートとラジオ放送のための活動

《マイスタージンガー》の収録の合間にも、ウィーン・フィルの公開コンサートや、メンバーの室内楽コンサートが行われた。

11月28日（火曜日）から30日（木曜日）にかけて3回開催されたオーケストラの公開コンサートは、いずれも工場における慰問行事だった。11月28日の公演を指揮したのはルドルフ・モラルトで、曲目はモーツァルトの《セレナード第13番「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」》、シューベルトの《ロザムンデ》から〈バレエ音楽第2番〉、ヨハン・シュトラウスⅡ世の《こうもり》序曲と《皇帝円舞曲》だった。11月29日（水曜日）に指揮台に立ったのはレオポルト・ライヒヴァインで、ヴェーバーの《魔弾の射手》序曲、グリークの組曲《ホルベアの時代から》、シューベルトの《ロザムンデ》から〈バレエ音楽第2番〉、マスカーニの《カヴァレリア・ルスティカーナ》間奏曲、ヨハン・シュトラウスⅡ世のワルツ《美しく青きドナウ》が披露された。11月30日もライヒヴァインが公演を指揮したが、前日とは曲目が少し異なっていた。すなわち、モーツァルトの《フィガロの結婚》序曲とベートーヴェンの《ロマンス第2番》（独奏はヴィリー・ボスコフスキー）が最初の2曲となり、この後はグリークの組曲《ホルベアの時代から》、シューベルトの《ロザムンデ》から〈バレエ音楽

第2番〉、ヨハン・シュトラウスⅡ世のワルツ《美しく青きドナウ》が続いた。

夜の室内楽のコンサートでも、コンサートマスターを中心とする演奏が行われた。11月28日（火曜日）と29日（水曜日）の19時からコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおける公演に出演したのは、シュナイダーハン四重奏団である。演目はディッターズドルフの《弦楽四重奏曲第5番》、シューマンの《弦楽四重奏曲第3番》、ドヴォルザークの《弦楽四重奏曲第14番》だった¹⁰⁰。11月29日（水曜日）の19時から楽友協会ブラームスザールでは、ウィーン・バッハ・ゲマインデがヘンデルとバッハの演奏会を開いた。女性によって構成された室内楽オーケストラ（指揮者はフランツ・クラウス）、エリーザベト・ルートゲルス（ソプラノ）、エルナ・ハラディク（チェンバロ）、エディット・シュタインバウアー（ヴァイオリン）という共演者のほか、ウィーン・フィルのメンバーからはマックス・ヴァイスゲルバー（ヴァイオリン）、ハンス・レズニチェック（フルート）、ハンス・ハダモフスキー（オーボエ）、ヘルムート・ヴァビッシュ（トランペット）が演奏に参加した¹⁰¹。11月30日（木曜日）の19時にコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおいては、ウィーン・フィルのコンサートマスターとして最年少のヴァルター・バリリによる公演が開催された。伴奏者にピアニストのローラント・ラウペンシュトラオホを招き、シューベルトの《ヴァイオリン・ソナタ第3番》、ベートーヴェンの《ヴァイオリン・ソナタ第5番「春」》、フランクの《ヴァイオリン・ソナタ》が演奏された¹⁰²。

このほか、12月3日の新聞記事において、リヒャルト・ワーグナー・ドイツ婦人同盟（Richard-Wagner-Verbund Deutscher Frauen）の主催により、負傷者のためのコンサートが開催されたと記されている。この催しにも、ウィーン・フィルのメンバーが出演している。記事によると、ウィーン国立劇場の歌手（ヒルデ・コネツニ、パウル・シェフラー）、カペルマイスターのフリッツ・クーバの伴奏、フィルハーモニーのトリオ（レオポルト・ヴラッハ、ヴァルター・クラインエッケ、ヒューバー＝マンシュ女史）の名前が認められる¹⁰³。

この頃、放送用に収録されたものとして、ウィーン・フィルハーモニー管楽アンサンブルのメンバーによるジャック・イベールの《木管五重奏のための3

つの小品》が残されている。ドイツ放送アーカイブのデータによると、収録日は1944年11月としかわからないが、記録の上ではクレメンス・クラウスが指揮したことになっている。これは誤りで、クラウスの「指揮記録」にこの作品の演奏は記載されていない。なぜこの時期にこのフランス音楽が収録されたのか、その経緯は不明である。後年の録音が誤って登録されたものではないようで、テープの管理番号は K390A/C、つまりナチス・ドイツ時代の番組制作グループ K が担当したことを示す記号も記されている¹⁰⁴。この時期のこのアンサンブルに参加していたのは、ハンス・レズニチェク、ローベルト・ニーダーマイヤー、ハンス・カメシュ、カール・スヴォボダ、レオポルト・ヴラッハ、ヴィルヘルム・クラウゼ、ゴットフリート・フォン・フライベルク、レオポルト・カインツ、ヨーゼフ・ヴェレバ、ヨーゼフ・ラックナー、カール・エールベルガー、オットー・シーダー、ルドルフ・ハンツルで¹⁰⁵、今回の録音ではこのうちの5名が演奏したことになる。

3. 結び

1944年11月のウィーン・フィルとそのメンバーによる活動に関して、本稿で示した内容を、3つの観点からまとめてみたい。

第一は、コンサート開催の曜日と時刻に関してである。今回のケースを見ると、ウィーン・フィルの公演が開催された曜日は、その多くは土曜日と日曜日、そして月曜日となっている。1944年10月以降のウィーン・フィル主催のコンサート、特にフィルハーモニー・コンサートは、計画されていた定期演奏会をそのまま実施したようである¹⁰⁶。そのため、土曜日がゲネラルプロベ、日曜日が本番という、劇場閉鎖以前のスタイルがベースとなった。今回の1944年11月の事例に即すと、フィルハーモニー・コンサートとしてはカール・ベーム指揮によるものがあったわけだが、これも土曜と日曜、そして再演として月曜に開催された。これ以外のもの、すなわち帝国放送協会との共催によるフィルハーモニッシェ・アカデミー、楽友協会主催による特別コンサートも、ディー

ルス指揮による1回を除き、土曜日から月曜日の間に行われた。クレメンス・クラウス指揮の11月5日と6日の公演は日曜日と月曜日だった。また、ヨーゼフ・カイルベルト指揮の楽友協会主催の11月25日と26日のコンサートも、土曜日と日曜日の開催である。これらも、長年、ウィーン・フィルが慣れ親しんだ勤務形態を踏襲してのことであつたと思われる。

このほかにもこの時期には、このオーケストラが請け負った任務として、ラジオ放送のための仕事や工場の慰問コンサートがあつた。特に前者は、劇場閉鎖後も兵役に代わる任務として重視されたわけだが、先の公開行事と被らないように、週の半ばに行われることが多かった。オーケストラのメンバーによるアンサンブル・コンサートは、小回りがきくということもあって、彼らの空き時間に随時開催された。

フィルハーモニー・コンサートをはじめとするウィーン・フィルのコンサートの開催の曜日について、劇場閉鎖前の慣習が認められることを先に指摘したが、1944年11月の公演の開演時刻は、空襲が激化する状況を踏まえて変更された。この前の1943/44年のシーズンの場合、土曜日は15時30分、日曜日は11時30分にコンサートは開始された。しかし、1944年11月の場合、正午頃にアメリカ軍による空襲があつたため、それを避けた結果、夜の19時からの開催となった。これは、ウィーン・フィルのオーケストラ・コンサートに限らず、アンサンブルの公演においてもおおむね同様であつたことが、今回の調査で示されたはずである。

第二は、オーケストラ以外の活動を行つたメンバーである。1944年11月のコンサートの場合、特にコンサートマスターのヴォルフガング・シュナイダーハン、ヴィリー・ボスコフスキー、そしてヴァルター・バリリの3名が活発に演奏していた。彼らを中心に結成されたアンサンブルの公演が同一プログラムで複数回、開催されることもあつた。そして、管楽器の首席奏者も、オーケストラの活動の合間に、公開行事に参加していた。こうした活動も一つずつ見ていくと、オーケストラのメンバーが連日、演奏活動に従事していた当時の実情が浮かび上がるように思われる。

第三は、演奏されたレパートリーである。オーケストラは、放送のための仕事に従事することが求められていたため、ドイツとオーストリアの古典的な作品にとどまらず、幅広い演目をこなしていた。ウールやプフィッツナーの最新作も、公開の場で演奏されるだけではなく、放送用に無観客で収録された。クラウスと行った放送用録音の演目に注目すると、公開コンサートでは取り上げられなかったものも数多く録音された。そうした中には、ヨーロッパの広範囲な音楽を放送するための番組に備え、ラヴェルの作品も含まれていた。こうしたオーケストラ作品のほか、ウィーン・フィルはオペラの録音の制作も担当した。モーツァルトの《魔笛》やワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のほか、多彩な放送コンテンツの確保のため、耳にする機会が少ないヴェンツェル・ミュラーの作品さえも取り上げられた。メンバーのアンサンブルの曲目は、全体としてみると、ドイツとオーストリアの古典的な作品が多いが、そこにドビュッシーやフランクといったフランス音楽、さらにドヴォルザークも加えられることで、レパートリーに彩が添えられていた。コンサートの規制緩和の背景として、休息の意味が重視されたことは本稿の初めで言及したが、コンサートの開催回数が平時と比較して大幅に減少していたこの時期においては、こうした多彩なプログラムが聞き手の心に強く訴えかけるものとなったように推測される。

さて、本稿の最初で当時の音楽界の概況に触れた際に述べたように、劇場閉鎖は音楽家に活動の機会を制限するだけではなく、聴衆層とコンサートの雰囲気に変化をもたらした。規制緩和でコンサートは行われたものの、オペラを実際に上演することはできなかった。このような政策に反対の意見を述べた者がいた。このことを述べて、本稿の結びとしたい。

劇場閉鎖の制作に対し、異を唱えたのはリヒャルト・シュトラウスである。彼はハンス・ヒンケルに対し、次のように書き送った。

11月5日付の貴殿の友好的なお手紙で述べておられたご提案に従い、私の希望を述べたく思います。慈悲深い女神が国民の誇りと愛である

ドイツ音楽を新たに蘇らせ、総統閣下とその協力者にこれまで特別にご懇意でご支援いただいたドイツ劇場が、芸術を必要としている国民に対して、早急にふたたび門戸を開くことができるよう、希望いたします。ヴァイマルの古典劇以来、ウィーンで生まれ、バイロイトやザルツブルクにまでかくも大きく発展するほど成長を遂げたドイツのオペラは、3000年にわたる文化発展の最後の花です。この活動停止が長引きますと、200年の伝統が失われ、ドイツ芸術の最も貴重な分野が永遠に枯れる可能性も危惧されます。慈悲深いご配慮が、人類をこの埋め合わせできない損失から守ることになります。これこそが私の希望であり、なおかつ確たる信念なのです。¹⁰⁷

彼はこのとき80歳という高齢だった。長年にわたりドイツのクラシック音楽文化を第一人者として牽引してきたことへの自負心もあった。演奏の実践面における豊富な経験から、その水準は継続によって維持される側面があることもよく理解していた。そのため、劇場閉鎖という文化政策は、これまで培ってきた伝統を根絶やしにする危険性を秘めていると考えたのである。このような危機意識からやむにやまれぬ思いで先の手紙を送ったものの、彼のこの思いが実を結ぶことはなかった。ナチス・ドイツの崩壊まで、劇場閉鎖は継続されたのだった。

*本研究は JSPS 科研費 JP26770071, JP17K02378, JP21K00218の助成を受けたものである。

謝辞

本稿の執筆のための資料収集にあたり、以下の各氏にご協力をいただきました。ここにお名前を記して、感謝申し上げます。

バイエルン放送協会 (Bayerischer Rundfunk)：マルティナ・ブラ (Martina Bulla)。ドイツ連邦公文書館 (Bundesarchiv)：ラルフ・エンゲル (Ralf Engel)，

カタリーナ・シュヴェラ (Katharina Schwella), カルメン・ロレンツ (Carmen Lorenz)。ドイツ放送アーカイブ (Deutsches Rundfunkarchiv) : イェルク・ヴィルショヴィー (Jörg Wyrchow), マリオン・ギルム (Marion Gillum), クリステアーネ・ポース＝ブライル (Christiane Poos-Breir)。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団歴史資料室 (Historisches Archiv der Wiener Philharmoniker) : シルヴィア・カーグル博士 (Dr. Silvia Kargl), 宮田奈奈博士。ザルツブルク・パリス・ロドロン大学・大学図書館 (Paris Lodron Universität Salzburg. Universitätsbibliothek) : アグネス・ブルンアウアー博士 (Dr. Agnes Brunbauer)。オーストリア国立図書館・音楽コレクション (Österreichische Nationalbibliothek. Musiksammlung) : アンドレア・ハラント博士 (Dr. Andrea Harrandt)。オーストリア放送協会 (Österreichischer Rundfunk) : ルート・エレナ・シュティフター＝トゥルンマー修士 (Mag. Ruth Elena Stifter-Trummer), インゲボルク・アルトグリュブル (Ingeborg Altgrübl)。ベルリン・ブランデンブルク放送協会 (Rundfunk Berlin-Brandenburg) : ジルケ・ゲーマン博士 (Dr. Silke Gömann)。

注

- 1 1944年9月と10月のウィーンのクラシック音楽文化に関しては、拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」(『桜文論叢』第106巻, 2022年)で詳細に論じた。
- 2 今回は, 1944年11月にウィーン・フィルとそのメンバーによる活動に限って扱うが, 実際のところ, この時期のウィーンにおいては, 歌手やソリストによる演奏者が少人数のリサイタルは開催されていた。ただし, 平常時に比べると公演数の総計は大幅に減っていた。1944年11月のオーケストラ・コンサートに関して言うと, ウィーン・フィル以外の団体がウィーンのコンスルトホールにおいて開催したクラシック音楽の公演は, わずかに1回を数えるにすぎない。1944年11月1日に楽友協会大ホールにおいて行われたリンツ・帝国ブルックナー管弦楽団による催しがそれである。シーズン開始前には他のオーケストラの客演も予定されていたのだが, すべて中止となった。当初企画されていたコンサートの概要については, 拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の26-29頁で述べた。
- 3 <https://www.wienerphilharmoniker.at/de/konzert-archiv>
- 4 <https://www.musikverein.at/archiv/>
- 5 <https://konzerthaus.at/datenbanksuche>

- 6 データベースの調査は2021年の8～9月と2023年の8～9月に実施し、その際に必要なデータを保存した。本稿の作成のあたり、2024年8月30日にあらためて取得したデータにアクセスし、掲載内容の確認を行った。
- 7 Österreichische Nationalbibliothek (ÖNB). Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 158/1-3. Clemens Krauss: Dirigir-Daten (手稿ノート). 論証の過程でこの資料に言及する場合には、本文中にクレメンス・クラウスの「指揮記録」である旨を示す。
- 8 Paris Lodron Universität Salzburg. Universitätsbibliothek. Sammlung Karl Böhm. Notizbücher (手稿ノート). 論証の過程でこの資料に言及する場合には、本文中にカール・ベームの「指揮記録」である旨を示す。
- 9 Thomas Keilberth: Joseph Keilberth. Ein Dirigentenleben im XX. Jahrhundert. Hrsg. von Hermann Dechant, Wien (Apollon Musikoffizin) 2007.
- 10 <https://anno.onb.ac.at/>
- 11 Historisches Archiv der Wiener Philharmoniker (HAWPh). Sendungen der Ravag „Wiener Philharmoniker“ 1924- [1945] (手稿ノート). 本資料を参照する場合には、本文中でウィーン・フィルの「放送記録」である旨を示す。
- 12 HAWPh. Karteikarte 1944/45.
- 13 Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg. (最終変更2024年8月26日12時13分) <https://www.geschichtewiki.wien.gv.at/Luftkrieg> (アクセス日: 2024年9月14日)
- 14 Johann Ulrich: Der Luftkrieg über Österreich 1939-1945. 3. Auflage. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1982.
- 15 Klaus Christian Vögl: Angeschlossen und gleichschaltet. Kino in Österreich 1938-1945, Wien (Böhlau Verlag) 2018.
- 16 Richard Strauss – Karl Böhm: Briefwechsel 1921 – 1949. Herausgegeben und kommentiert von Martina Steiger, Mainz u.a. (Schott) 1999, S. 348.
- 17 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 6. 10. 1944, S. 2.
- 18 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 20. 10. 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 20. 10. 1944, S. 2.
- 19 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 10. 12. 1944, S. 5.
- 20 Kleine Wiener Kriegszeitung, 19. 12. 1944, S. 7.
- 21 フランク・ティース編 (仙北谷晃一訳) 『フルトヴェングラーの手紙』(白水社, 1972年), 131頁。
- 22 Johann Ulrich, a. a. O., S. 21; Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg.
- 23 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 7. 11. 1944, S. 2.
- 24 Neues Wiener Tagblatt, 8. 11. 1944, S. 2.
- 25 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 4. 11. 1944, S. 4; Wiener Stadt- und

- Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg.
- 26 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 27. 10. 1944, S. 3.
- 27 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 7. 11. 1944, S. 2. 10月28日の時点では、ピアノ伴奏はカペルマイスターのクーバとされていた（Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 28. 10. 1944, S. 4）。
- 28 ÖNB. Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 88. Sekretariat von Clemens Krauss (?) an die Auslandsstelle für Musik. Betrifft: Italien, 14. 8. 1944.
- 29 Johann Ulrich, a. a. O., S. 21; Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg.
- 30 楽曲構成は、論者が所有する当日のプログラムによる。
- 31 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 8. 11. 1944, S. 2. 本稿では引用しないが、以下の新聞においてもこの公演の批評が掲載された。Kleine Wiener Kriegszeitung, 7. 11. 1944, S. 7; Neues Wiener Tagblatt, 8. 11. 1944, S. 2.
- 32 コンサートで演奏されたビゼーは、1944年9月に収録されていた。詳細は、拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の36～37頁を参照。
- 33 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler: Musikschätze der Reichs-Rundfunk-Gesellschaft. Die Rückkehr von ca. 1.500 Tonbändern aus Moskau ins Berliner “Haus des Rundfunks”, Berlin (Sender Freies Berlin Schallarchiv) 1992, S. 243. この音源は、旧ソ連の Melodiya レーベルから1985年に LP レコードとして発売された（レコード番号 M10 46981 001）。今回の調査に際して、テープを所有しているベルリン・ブランデンブルク放送協会（Rundfunk Berlin-Brandenburg）より、同録音を聴く機会を作っていただいた。ベルリンに保存されている録音では、冒頭部分に音声の欠落が認められる。先述の旧ソ連のレコードでは再現部を使用してこの部分が修復されたとみられ、オリジナルテープの音の抜け落ちはない。
- 34 オーストリア放送協会に保存されている録音に関して、モーツァルトの資料請求番号は QM01/UK21544_H で、演奏時間22分48秒、収録日は不詳とされている。一方、ウールの資料請求番号は QM01/UK21609_H, 演奏時間は19分25秒、収録は1965年となっている。クラウスは1954年に没しているため、ウールの1965年というデータは、ダビングが行われた年と思われる。今回の調査にあたり、ウールは同局より研究用に録音を提供していただいたが、モーツァルトの《ジュピター》は著作権上の理由でアクセスできなかった。《ジュピター》は、同局所有のものと同一音源と思われるニホンモニター株式会社から2008年に刊行された CD 「クレメンス・クラウス スペシャル BOX」所収のものを参照した（CD 番号 RIPD-0001）。この CD にはウールも収録されており、これによると同曲の収録日は1944年11月3日と4日である。
- 35 Johann Ulrich, a. a. O., S. 21; Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg.
- 36 この録音はドイツ放送アーカイブ（Deutsches Rundfunkarchiv）に残されている。

- 収録データに関しては、1944年とあるのみで、日付は不明である。Deutsches Rundfunkarchiv (DRA). K000613929 (Archivnummer: 1941747) : Anton Bruckner: Te Deum, Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), 1944 (Aufnahmedatum).
- 37 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler, a. a. O., S. 143. この音源については、ベルリン・ブランデンブルク放送協会より、デジタルコピーを提供していただいた。
- 38 リヒャルト・シュトラウスの歌曲のうち、〈ツェツィーリエ〉と〈君を愛す〉を除く3曲が現存している。DRA. K000498094 (Archivnummer: 1941611). Richard Strauss: Winterliebe, Julius Patzak (Tenor), Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), 9. 11. 1944 (Aufnahmedatum) ; DRA. K000613782 (Archivnummer: 1941743). Richard Strauss: Morgen, Julius Patzak (Tenor), Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), o. D. (RRG 1939-45) ; DRA. K000613927 (Archivnummer: 1941747). Richard Strauss: Freundliche Vision, Julius Patzak (Tenor), Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), o. D. (RRG 1939-45). バイエルン放送協会 (Bayerischer Rundfunk) にも、〈懐かしい面影〉(資料請求番号6606875 000 (BR) BAND Mono) と〈朝〉(資料請求番号6606877 000 (BR) BAND Mono) の録音が残されている。
- 39 クレメンス・クラウスの「指揮記録」によると、モーツァルトの行進曲は全部で3曲、演奏された。これらの行進曲の録音については、存在が確認できなかった。
- 40 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 5. 12. 1944, S. 4; Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 12. 1944, S. 2.
- 41 新聞では曲目を特定できないため、以下の資料に掲載された、当日のこの番組の曲目一覧を参照した。この文書は、放送当時、関係者に配布されたものである。Hanns Kreczi: Das Bruckner-Stift St. Florian und das Linzer Reichs-Bruckner-Orchester, Graz (Akademische Druck- und Verlagsanstalt) 1986, S. 248.
- 42 Walter Barylli: Ein Philharmoniker einmal anders, Wien (Verlag für photographische Literatur A. Barylli) 2006, S. 40.
- 43 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 24. 10. 1944, S. 3.
- 44 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 5. 11. 1944, S. 4.
- 45 この公演の批評は、以下を参照。Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 11. 1944, S. 3.
- 46 シュナイダーハンの略歴については、以下を参照。Christian Merlin: Die Wiener Philharmoniker. Die Musiker und Musikerinnen von 1842 bis heute. Bd. II, Wien (Amalthea Verlag) 2017, S. 148f.
- 47 Oliver Rathkolb: Führertreu und gottbegnadet. Künstlereliten im Dritten Reich, Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1991, S. 130.
- 48 シュナイダーハン四重奏団とそのメンバーの活動については、以下を参照。Christian Merlin, a. a. O., S. 90f., 112, 148f. und 168; Otto Strasser: Und dafür wird

- man noch bezahlt. Mein Leben mit den Wiener Philharmonikern, Wien und Berlin (Paul Neff Verlag) 1974, S. 167f.; Franz Bartolomey: “Was zählt, ist der Augenblick”. Die Bartolomeys. 120 Jahre an der Wiener Staatsoper, Wien (Amalthea Signum Verlag) 2012, S. 76.
- 49 Theodor Kellenter: Die Gottbegnadeten. Hitlers Liste unersetzbarer Künstler, Kiel (Arndt) 2020, S. 222f. u. 228.
- 50 Otto Strasser, a. a. O., S. 215.
- 51 ゲッベルスはドイツ帝国放送協会の主力番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」において、ウィーン・コンツェルトハウス四重奏団ではなく、シュナイダーハン四重奏団を起用することを求めた。Bundesarchiv (BA). R 55/559. Protokoll der Programmsitzung am Mittwoch, 21. Februar 1945, 15.30 Uhr unter Leitung von Herrn Ministerialdirektor Fritzsche. この件については、拙稿「ナチス・ドイツ時代のラジオ音楽番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」に関する研究」(『桜文論叢』第107巻, 2023年)の87頁でも扱った。
- 52 Neues Wiener Tagblatt, 15. 11. 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 17. 11. 1944, S. 2.
- 53 Kleine Wiener Kriegszeitung, 15. 11. 1944, S. 7.
- 54 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Die Wiener Philharmoniker an den Reichssender Wien, 25. 9. 1944.
- 55 Hanns Kreczi, a. a. O., S. 248; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 11. 1. 1945, S. 2.
- 56 Innsbrucker Nachrichten, 15. 2. 1945, S. 2; Neues Wiener Tagblatt, 16. 2. 1945, S. 2.
- 57 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Hans Sachs an die Wiener Philharmoniker, 30. 9. 1944.
- 58 DRA. K000589615 (Archivnummer: 1931448). Wolfgang Amadeus Mozart: ‘Zu Hilfe, zu Hilfe, sonst bin ich verloren’ aus „Die Zauberflöte“, Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 14. 11. 1944 - 16. 11. 1944 (Aufnahmedatum).
- 59 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler, a. a. O., S. 133. この文献に添付されている情報補完のための冊子もあわせて参照した。
- 60 このソ連接続テープをもとに作成したと思われるCDが発売されている。Mozart in tempore belli. Preiser 90249 (CD), ©1995. このCDによると、録音データは11月14日から16日である。
- 61 Konzertvereinigung Wiener Staatsopernchor (Hrsg.) : Tätigkeitsbericht der Konzertsaison 1944/45 und 1945/46 (Jubiläumsband. 20 Jahre Staatsopernchor Bd. 8), Wien 1946, S. 7 und Druckfehler-Berichtigung. この資料の本文においては、1944年11月14日と11月17日とされているのだが、正誤表において11月14日から17日と記載されている。データを改めて見直す過程があってもなお、11月17日という日付には訂正が施されておらず、この冊子を作成した1946年の時点においてはこの日付を

含む資料が存在していたことになる。

- 62 Neues Wiener Tagblatt, 16. 11. 1944, S. 1.
- 63 カール・ベームの「指揮記録」と次の資料による。John Hunt: Vienna Philharmonic and Vienna State Opera Orchestras. Discography 1905-1989. Vol. 1, London (John Hunt) 2000, S. 142.
- 64 Johann Ulrich, a. a. O., S. 21-22; Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg.
- 65 Neues Wiener Tagblatt, 28. 12. 1944, S. 3.
- 66 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 31. 12. 1944, S. 4.
- 67 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 3. 1. 1945, S. 2.
- 68 Joseph Goebbels: Die Tagebücher von Joseph Goebbels. Hrsg. von Elke Fröhlich, München u.a. (K. G. Saur) 1993-2008, Teil II, Bd. 14, S. 501. 大晦日の番組に関して、ゲッベルスはこの翌日の日記にも、自身が「ラジオ放送のために練り上げた精神の高揚をもたらすプログラムや娯楽プログラム」が「晩になるにつれ素晴らしい効果を発揮している」と書いている (Ebd, Teil II, Bd. 15, S. 33)。
- 69 BA. R 55/556. Protokoll zur Programmsitzung am Mittwoch, 27. Dezember 1944, 15. 30 Uhr.
- 70 Kleine Wiener Kriegszeitung, 1. 2. 1945, S. 4.
- 71 Kleine Wiener Kriegszeitung, 2. 2. 1945, S. 3.
- 72 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 23. 12. 1944, S. 2.
- 73 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 11. 11. 1944.
- 74 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 20. 12. 1944, S. 4.
- 75 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 23. 12. 1944, S. 2.
- 76 このコンサートは、もともと11月16日に開催が予定されていた。コンサートのコンセプトも含め、ウィーン楽友協会の「コンサートアーカイブ」の情報による。
- 77 このコンサートの予告は『フェルキッシャー・ベオバハター』の広告で確認できるが、開催済みのコンサートの再演とされている (Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 5. 11. 1944, S. 4)。同年11月12日の同紙にはこのコンサートの批評が掲載されている (Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 11. 1944, S. 3)。
- 78 11月21日のコンサートについては、ウィーン・コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク検索」に記録は存在しない。情報源は以下である。Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 11. 1944, S. 5; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 19. 11. 1944, S. 5. 11月19日の広告によると、11月13日の公演のチケットも有効とされている。
- 79 ウィーン・コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク検索」のデータからは曲目を特定することができないため、『フェルキッシャー・ベオバハター』の演奏評を参照した (Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 2. 12. 1944, S. 2)。両日の

コンサートが「第2夜」とされていることについては、ウィーン・コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク検索」のデータのほか、『フェルキッシャー・ベオバハター』の広告を参照した（Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 11. 1944, S. 5）。

- 80 Clemens Hellsberg: Demokratie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker, Zürich (Schweizer Verlaghaus) 1992, S. 673.
- 81 この情報は、以下のコンサートの批評による。Kleine Wiener Kriegszeitung, 24. 11. 1944, S. 6.
- 82 BA. R 55/20616. AR Klaus (Abteilung Kultur. Hauptreferat Musik) an den Herrn Minister. Betrifft: Auftreten ausländischer Künstler in Deutschland, 14. 10. 1944. 本項で先に言及したロヴロ・フォン・マタチッチもディールスと同様に、ドイツ国内で演奏許可を与えられていたことが同文書で確認できる。ちなみにこの文書によると、ナチ政権によって演奏が許されていた当時の「日本」の演奏家は、近衛秀麿、諏訪根自子、安益泰の3名である。
- 83 Kleine Wiener Kriegszeitung, 24. 11. 1944, S. 6; Neues Wiener Tagblatt, 24. 11. 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 25. 11. 1944, S. 2.
- 84 Neues Wiener Tagblatt, 11. 3. 1945, S. 3.
- 85 DRA. K000634566 (Archivnummer: 1941787). Ludwig van Beethoven: Quartett e-moll, Op. 59 Nr. 2, Schneiderhan-Quartett, 22. 11. 1944 (Aufnahmedatum).
- 86 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 23. 11. 1944, S. 3.
- 87 拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」, 26-27頁。
- 88 Kleine Wiener Kriegszeitung, 28. 11. 1944, S. 6; Neues Wiener Tagblatt, 29. 11. 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 2. 12. 1944, S. 2.
- 89 Thomas Keilberth: a. a. O., S. 127.
- 90 Ebd.
- 91 Konzertvereinigung Wiener Staatsoperchor, a. a. O, S. 7. ブラームスはこの編成による合唱曲を残している。作品17がそれだが、この作品は3曲ではなく、4曲で構成されるものである。
- 92 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 5. 11. 1944, S. 3.
- 93 詳細は拙稿「バイロイト音楽祭とナチス・ドイツ興亡——ラジオ放送をめぐる実証的検証」（『オペラ／音楽劇研究の現在——創造と伝播のダイナミズム』, 水声社, 2021年）, 205-206頁を参照。
- 94 前掲論文, 205-206頁。ドイツ帝国放送協会では、同じ1943年バイロイト音楽祭で上演されたヘルマン・アーベントロート指揮による音源も確保していたものの、同年夏に放送されたきりであることから、あらためてそれを流すことが難しい状況があったと推察される。
- 95 DRA. K000590667 (Archivnummer: 1931519). Richard Wagner: Die Meistersinger

- von Nürnberg, Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 28. 10 [sic.] . 1944 - 5. 12. 1944 (Aufnahmedatum). 今回の調査にあたっては、この録音に加え、Preiser 社からリリースされた CD (CD 番号90234, 1994年発売) も参照した。ウィーン・フィルの「放送記録」においても、放送の技術担当者以外、つまり出演者は記載されているのだが、ハンス・フォルツを歌ったマルヤン・ルスの名前は脱落している。
- 96 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Hans Sachs an die Wiener Philharmoniker, 30. 9. 1944.
- 97 Völkischer Beobachter. Süddeutsche und Münchener Ausgabe, 3. 2. 1945, S. 4.
- 98 Neues Wiener Tagblatt, 18. 2. 1945, S. 2.
- 99 Preiser 社による同音源の CD (CD 番号90234, 1994年発売) に添付された解説書。トラックリストの注記に音源の補完について記述がある。
- 100 ウィーン・コンツェルトハウスの「アーカイブ・データバンク検索」のデータにおいて両日の演目の同一性が確認できないため、11月26日の『フェルキッシャー・ベオバハター』の広告から裏付けを得た (Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 26. 11. 1944, S. 5)。なお、このコンサートの開催について告知されたのは11月19日の『フェルキッシャー・ベオバハター』の広告が最初と思われるが (Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 19. 11. 1944, S. 5), 先述の11月26日の広告においてはチケット完売とされている。本公演の演奏評は以下を参照。Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 12. S. 2.
- 101 オーケストラが女性メンバーで成り立っていたことは以下の演奏評で確認できる。Kleine Wiener Kriegszeitung, 1. 12. 1944, S. 7. このほかの演奏評として、以下も参照。Neues Wiener Tagblatt, 6. 12. 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 12. 1944, S. 2.
- 102 本公演の演奏評は以下を参照。Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 12. S. 2.
- 103 Neues Wiener Tagblatt, 3. 12. 1944, S. 2. このコンサートの開催日は定かではない。この記事の後半では、この同盟の主催で行われた別の行事、すなわち王宮の野営病院におけるウィーン国立歌劇場合唱団の公演が言及されている。この開催日は、ウィーン国立歌劇場合唱団の活動報告によると、11月28日である (Konzertvereinigung Wiener Staatsoperchor, a. a. O, S. 8)。以上を踏まえ、本文で触れた公演は便宜的に11月下旬の項において言及した。
- 104 DRA. K000498248 (Archivnummer: 1941615). Jaques Ibert: 3 pièces brèves, Bläservereinigung der Wiener Philharmonike, Clemens Krauss (Dirigent) [sic.] , 11. 1944 (Aufnahmedatum).
- 105 Clemens Hellsberg, ebd.
- 106 Ebd, S. 497.
- 107 Richard Strauss – Clemens Krauss: Briefwechsel. Gesamtausgabe. Hrsg. von Günter Brosche, Tutzing (Hans Schneider) 1997, S. 530. これは、リヒャルト・

シュトラウスがクレメンス・クラウス宛の手紙に同封した、ヒンケル宛の文書の写しである。同様の手紙を、シュトラウスは同日にカール・ベームにも書いている。
Richard Strauss – Karl Böhm: Briefwechsel 1921 – 1949. Herausgegeben und kommentiert von Martina Steiger, Mainz u.a. (Schott) 1999, S. 179.